

原作ブレイク上等！！ 逆襲のオリ主

オルフィーナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新たなボディ その奥に
たぎるは 热き 魔族の血
大地のパワー 吸收し 黒のコアに 火をつけろ!
穢れのないその瞳に
映るは 遥か 天人の地
前世の心 胸に秘め
終末（おわり）の時に 涙する
夢を追いかけ 生きた 逆襲人たちの
夢の終着 今 立ち上がり
目覚めの刻（とき）は来た!
行け！ 我等の尖兵よ
魔族の期待 背に受けて
行け！ 我等の尖兵よ
魔界のライバル 押しのけて

てな感じで進めて行こうと思います。

亀更新、駄文、自己満足な要素を多分に含んでおります。
作者はメンタルがガラスなので、取り扱いに注意です。
それでも読んで下さる心の広い読者様に感謝を

挿絵がつきました。

挿絵が入っているタイトルには☆マーク追加しました。

依頼したら簡単に絵を描いて貰えるなんて便利な世の中になつた
ものです♪（メルカリ凄い!!） 今回挿絵を作成してくれた絵師の方
に百万の感謝を・・・

目 次

第0部 魔界編

いきなりですか!! VSラスボス	☆1	1
VSラスボス・・まさかの勧誘!?		
ならば同士になれ!!・・つい乗つちゃった♪		
原作開始前		
第1部 デルムリン島編		
勇者の家庭教師!!		
ダイ 特訓!!!	☆2	
魔王の出現・・・!?		
ハドラーの正体・・・!!		
対決!!ハドラー対アバン		
アバンのしるし	前編	
アバンのしるし	後編	
ダイ激怒!!!		
大冒険への旅立ち!!		
第2部 口モス王国編		
魔の森のマアム		
獣王!!クロコダイン		
獣王のおたけび!!		
集え!!アバンの使徒		
アバン!!我らが師		
第3の仲間!!		
危機迫る口モス		
百獣総進撃!!		

59 56 53 51 47 45 43 41

38 35 32 30 27 23 21 17 13

11 8 5 1

外伝 おそらく使われないお話シリーズ

ある空間での出来事・・・アバンVSキルバーン?

まさか俺が・・・☆3

第0部 魔界編

いきなりですか!! VSラスボス ☆1

「そこの女、この魔界で天界装備を身に纏つて堂々としているとはい一度胸だ!!」

突如この場所に放り出された私に向つて声を掛けて来たのは、圧倒的なプレッシャーを纏つた魔族の男でした。

私の装備は、男が言う様にとにかく目立ちます。まずは剣ですが、切られた者を滅する様な存在感を放つ神劍を腰にさげ、鎧は白銀をベースにまるで、宝石を散りばめたごとく光輝く聖衣を纏っています。

魔界のど真ん中でそんな格好をしていれば、いやでも目立ちます。
ヤクビヨウガミ
神が私に目立つ天界装備を渡したのも、絶対にこの様なトラブルを狙つての事でしょう。

この男・・・・どこかで見た覚えがあるのですが、中々思い出せません。そんな事を考え込んでいたのですが、その隙に相手は容赦なく攻撃を仕掛けて来ました。その一撃には、通常ではありえないレベルの鬪気が込められています。破滅的なエネルギーの奔流が、私に迫つて来ます。咄嗟に飛翔呪文で、後方に下がつて回避してしまいました。殆ど無意識の行動だつたのですが、何とか切り抜ける事が出来た様です。

油断していく良い相手では無さそうです。一撃に込められている力が否応なしに、死を予感させられます。本気で行かなくては、あつと言う間にぬつ殺されてしまうでしょう。とりあえず今は相手の正体の事は忘れて、戦闘に専念する事にします。

不足の為、省略させて頂きます

戦闘描写は作者の力量レベル

「やるな・・・余どこまで戦える者など、魔界広しと言えどもそうはないであろうな!!」

そう言いながらも戦闘態勢を崩さないこの男からは、途方も無い魔力の高まりを感じました。次の一手で、この勝負を決めに掛かつて来ているのは明白でしょう。

先程の戦闘で男が火炎系の呪文を好んで使用していた事から、火炎呪文^{メラゾーマ}を撃つてくるであろう事は予想が付きました。

(この男たしかに見覚えがあるが……と思い出せませんね)

私も急いで呪文の準備を始め、火炎呪文を選択しました。(ここ)で何か別系統の魔法をぶつけたら、私的に負けた氣がするんですよね)

「火炎呪文^{メラゾーマ}
『遺失火炎呪文^{メラゾーマ}アーヴィング』」

お互^イいの呪文は空中で激突し、均衡状態を保っています。威力はまったくの互角の様です。本来であれば追撃を行うべきなのですが、男の呪文を見てあっけにとられてしました。私はその光景に思わず『……あれは、カイザーフェニックス』と呟いていました。

「呪文に名前など付けた事などなかつたが、なかなか良い名前だな。これからそう呼ぶことにしよう」男はそう言つてこちらに話し掛けて来たのですが、私はそれどころではありませんでした。

最初に確認しておけば良かつたのですが、そもそも言つていられません。不自然にならない様に自分の名前を名乗つて、男の名前を聞き出します。男は思つたよりあつさりと名前を教えてくれましたが、やつぱり大魔王バーン様でした。しかもよりもよつて、凍れる時間の秘法によつて肉体の時間を止めてしまう前の真大魔王^{さうきよ}状態のバーン様とは……(そういうえば、私つてばバーン様とやり合えるぐらいの強者つて事なの??)

ドラクエの世界つて事は解つていたが、よりによつてダイの大冒険の世界だつたとは夢にも思いませんでした。よりによつてあのバーン様と一緒に打ちするなんて……どこまでかき回す気ですか

タ
タ
リ
ガ
ミ
神
め
!!

V S ラスボス・・まさかの勧誘!?

事の始まりは、私が事故死したことから始まります。^{存在X}神の暇^{ひま}まで、死ぬ様に仕組まれた。↓転生させてやろうと言われる（偉そうに言いやがって!!）↓断つた（断つた時のあいつの顔といつたら・・・・・・・・・ 実に気分は良かつた。）

私の意見など無視して、話は進んで行きます。手始めに、肉体の再構成から始まりました。^{エロジジイ}神の趣味なのか、かなりのわがままボディに変更され、ピンク色の髪にメガネを装着のおつとり系の美女・・・（そう・・・^{えろじい}神の趣味で、男のはずが女に性転換させられてしまつたのです。）

魔力や身体能力も、とんでもないレベルで付加されている様です。次に、戦闘知識を詰め込まれるされました。剣技・魔法・鬪氣何でもあります。ベースはド〇クエXっぽいですね。装備も超一流を用意された様です。改造された私には分かりますが、これらの品々には相当な神力を感じます。

こんな戦闘マシーンを作つて、逆襲されないと思つてているんでしょうか？と心の中で思つていたら「それが面白いのだよ・・・・・・・・・ 虫の足搔きがな」と言つてご満悦の様子でした。

こんな感じで、改造人間のフルコースを食らつたあげく、魔界に墮^おとされあまつさえ、大魔王バーン様と一騎打ちするはめに・・・・・・・・・くそがあ！！・・・・・・・・・はつ私とした事が、思わず言葉使いが乱暴になつてしまつたわ（無意識に女言葉に矯正されてしまう、強制力が働いている様です）

しかも私にはちゃんと○△□×と言う名前があるのですが、発音す

発音不能

る事も書くことも出来ません。仕方がないので、昔好きだつたゲームの女性キャラから名前を頂く事にしました（姿は似ていませんが、そのキャラがとても強かつたので！）しかし本名を封印されると、何という呪いなのでしょうか!!

そんな私を尻目にバーン様は、明らかに私との戦闘を楽しんでいる雰囲気です。こつちは正に命がけ・・・メラガイアとメラゾーマが威力的に同じなんて、何でデタラメな魔法力なんでしょう。しかも向こうは、タメが要らない様です。このまま戦い続ければ、確実に死にますね・・・

そんな風に悩んでいるとバーン様の態度が一転し、圧倒的威圧感がこもった口調で話しかけてきました。「ある程度強いのは見ただけで分かっただが、戦闘をして見て改めて思つた。お前程の強者をただ殺してしまう事があまりに惜しいと・・・俺の陣営に来ないか？」と言ひ更に、「俺はこれから大軍団を作る。魔界全土を統一し、王となるつもりだ。貴様がこちら側に来てくれたら、我が宿願にかなり近づく事が出来る。」

こうなつたらバーン側に付くのも面白いかもです。この状況に追い込んでくれた神に復讐してやる為に、天界に攻めいつて破壊のかぎりを尽くすつても良いかもしれません。（死ぬ前は男だつたのに、性別やら言葉使いや仕草まで面白半分に変えられた借りを返してやります!!）

そんな事を思つている間にも、バーン様の演説は続いています。「神々が憎い！ 我らを冷遇し地上の人間どもにのみ平穏を与えた奴らの愚挙が許せぬッ!! ならば我が・・・我々が神を倒すのみ!!・・・我が元に来いリーゼロツテよ!!」

大魔王自らのガチスカウトです。私にも思う所が多くあるので、質

問の返事次第ではスカウトされる事にしましよう。『さて、未来の大魔王様、部下になつた私にどんな役職ポストを用意してくれるのでしょうか?』と今後の進退をかけて、悪戯と挑発と好奇心を込め、バーン様に聞いて見ました。

あっさりと了解を得られた事に一瞬あっけに取られた様ですが、ニヤアと笑つてバーン様はこう仰いました。「我が友と言うのはどうだ?」と・・・今度は私があっけに取られる番でした。思わず私は笑い出してしまいました。『面白い・・・面白いですよ大魔王・・・そうか・・・そう来ましたか・・・あはつ・・・あは・・・あは・・・流石は大魔王バーン・・・アレとは器が違いますね。』

この後、リーゼロツテ(バーン様に長いなと言われ)通称リーゼが、ダイの大冒険の世界にデビューする事になつたのでした。

ならば同士になれ！・・つい乗つちやつた♪

あれから3000年の時が経ちました。魔族でもない私は寿命で死ぬかもと思つていましたが、まったく年老いる事はありませんでした。逆に年々とレベルアップが続き、とうとう大魔王様を上回る強さを手に入れてしまったのです。

今や我らのバーン様は、魔界に広大な領地を確保しており、魔界の3大巨頭の一人に数えられる程になりました。私も若干ながらお手伝いをさせて頂きました。（バーン様曰く、あれが若干かと苦笑されてしましました）そんなこんなで、ある程度の地盤固めが終わつたバーン様は、原作通りに凍れる時間の秘法で力を温存し始めました。

2000年程前に、「大魔王様のお言葉は全てに優先する」で有名なミストが新規加入してきました。バーン様の肉体を預かる任に付いたミストの活躍には、目を見張る物があります。戦つて良し、計略を用いても良し、領地を治めても良しとその活躍っぷりは、魔界全土にも勇名を轟かせています。彼の活躍なくしては、現在の魔王軍はなかつたかもしません。

そんな彼に私は『リーゼ様』と呼ばれ尊敬されています。恐らく修行に次ぐ修行で、とうとうバーン様に追いつき追い越した事が、私への高評価に繋がっているのでしょうか。

私は今迄の自分の生き立ちや、原作知識の事などをバーン様とミストにだけは話してあります。もちろんバーン様が負ける事やミストが消滅する流れは、全力で回避する方向です。それだけではなく、バランやダイを仲間に引き込んで、戦力増強を行なう事も視野に入っています。

どこまで味方にするかで、方向性が変わつて来るでしょう。現在バーン様と共に、計画を練つてゐるところです。ミストは皆殺しにしたい様ですが、私とバーン様は天界殲滅という野望があるので、信頼できる戦力は多い方が良いと考えています。

更に1000年が経過しました。私が加入し歴史を変革したせいで、大魔王軍の戦力は大幅にアップしました。信頼出来る幹部も増え、原作程度の戦力は問題にならなくなっています。超魔生物化したハドラークラスならそれこそ、私の部下（私にも直属の部隊と部下が出来ました）にも数名います。

私の部隊を結成するに当たつて、素質のある魔族を魔界全土よりスカウトして来ました。その精銳達に鬼の様な修行（どこぞの帝国の魔導大尉さんもドン引きレベルで!!）を課した結果、私の部隊だけでも、勇者パーティを殲滅出来る程度の戦力を確保するに至つています。完全に原作ブレイクな状態ですが、天界殲滅を目標としているの仕方がない事でしょう。

そんなある日の事です。魔界3巨頭の一角である冥竜王ヴェルザーが、バランに討伐されるイベントが発生しました。もうそんな時期かと思つていましたが、しばらく経つて奴がバーン様の元にやつてきました。お約束通りのやり取りを経て、物騒な死神を飼つて見るのも一興だとバーン様が仰いました。（バーン様も中々の役者つぱりですね）

『キルバーンが陣営に加わりました』

原作通りだつたら
本来であれば、キルバーン程度でも幹部待遇で迎えられるはずだつたでしよう。しかしここは、原作ブレイクを前提として、天界撃滅を目的にした組織に生まれ変わった、大魔王軍なのです。はつきり言ってお呼びじやないのですが、目くらまし程度には働いてくれるでしよう。

バーン陣営は天界決戦の為、本来の戦力を隠してきました。そんな事はまったく知らないキルバーンの待遇ですが、ガチ武闘派集団の中に放り込みました。本気でやれば、そこそこ使える駒になるでしょう。奴も持ち前の図々しさで、頑張っている様です。

状況に慣れて来て、若干の余裕が出来たからでしょう。なにやらコソコソと動き回っている気配がします。変な事を企まないとも限りませんので、私は奴に釘を刺す事にしました。私の部隊を全員集めて、全力でプレッシャー掛けさせました。

そして『あんなヌルイ環境では、物足りないでしよう?私の部隊に入れてあげようか♪』と問い合わせました。キルバーンは表面上は平静を保つて、「ちょっと僕の趣味じゃないですね」などどふざけています
実は本体
が、それが見せ掛けである事は、私にはバレバレです。(なにせ使い魔のピロロが、ガクブルしていますら……)

原作開始前

あれから幾ばくの時が流れました。魔王ハドラーが、カール王国に戦争をふっかける時期になり、アバン先生が打倒ハドラーに向け旅立つて行きました。ミーハー興味本位でアバン先生に接触して、実力を隠しつつ初代勇者パーティに参加しました。

勇者／アバン 戰士／ロカ 僧侶／レイラ 魔法使い／マトリフ 魔法剣士／リズと^{本名}言う編成になりました。リーゼロツテはなんかいやですし、リーゼは大魔王様から頂いた名です。地上の人に対しても愛称つて事で自分を納得させ、リズつて名前で行く事にしました。

本来であれば4名パーティだったが、強引に5名に変更（ちょっとしたブレイク）して冒險を繰り広げました。無論最初から、パーティだつた訳ではありません。打倒魔王を目指し、最初はアバンとロカが旅に出ました。戦力不足を痛感したころを見計らって、私が売り込みを掛けました。その後、レイラやマトリフが加入し5人パーティとなつたのです。色々な出来事があり、最終的にアバン・ストラッシュや無刀陣を完成させ、ハドラーを討つ事に成功しました。

ここで問題になるのが、凍れる時間の秘法が不発に終わる件です。失敗する事は解っていますが、これがないと原作が進まないので放置することにしました。これらの苦難を乗り越えちゃつかり、アバン・ストラッシュを会得して二人でダブル・ストラッシュをハドラーに決めたり、極大消滅呪文ロードアをマトリフと開発したり、ロカとレイラをくつ付けたりしたのはご愛嬌と言つたところでしようか。

バーン様は、結局ハドラーを復活させる事にした様です。あまり原作を変化させすぎると、今後の展開が読めなくなると考えている様で

す。最後の部分を多少変化させるぐらいが、丁度良いと仰つていました。

予定通りハドラーは力を取り戻す為、しばらく休眠する事になりました。世界に束の間の平和が訪れましたが、アバンはフローラ姫とくつ付かず旅にしてしまいました。（なにかしらの予感があつたのでしようか？）

私は原作を先取りする形で、原作開始前のデルムリン島に遊びに来ています。そこで未来の勇者であるダイ少年と、面識を得る事に成功します。仲良くなつたので、流派・技名を誤魔化して、今之内に『大地斬』と『海波斬』を仕込んでおきました。これで、テムジン一派の邪魔をする事ぐらいは出来るでしょう。

この後、レオナ王女を救う事に成功したダイ少年は、パプニカ王国の依頼でやつて来た『勇者の家庭教師』アバンに師事する事になり、そして原作が開始される事となります。

第1部 デルムリン島編

勇者の家庭教師!!

ついに原作が開始され、世界中の各都市でモンスター達が暴れ出しました。人々は、魔王が復活した事を否応なしに知る事になつたのでした。

天界殲滅作戦の準備も6割程終了したので、息抜きにそろそろ原作が始まるであろう、「デルムリン島にこつそり観光しに行こう」と思いました。もちろん姿を見せずに、こつそりと見ていくだけですが・・・。

南海の孤島である「デルムリン島」でも、普段は大人しい怪物達が凶暴化し、破壊のかぎりを尽くしています。ダイ少年も突然凶暴化したモンスターに、手を焼いている様ですね。何故かゴメちゃんだけは凶暴化をまぬがれ、ダイ少年に付き従つて飛び回っています。

ダイ少年の育ての親である、プラス老も凶暴化しかけていましたが、精神力で何とか耐えている状態です。ダイ少年に逃げる様に勧めるプラス老と、「そんなの勇者のする事じゃないよ!!」と拒否するダイ少年でした。そんな時、赤い服を着た剣士風の男と、魔法使いの服装をした少年が島に訪れました。

ぶつちやけ、アバンとポップなんですがね。アバンは突然物凄い勢いで、剣で地面を掘りながら突進し、モンスターを跳ね飛ばしながら進んで行きます。剣で描いた魔法陣が完成し、アバンお得意の「マホカトール」^{マホカトール}破邪呪文が発動しました。

凶暴化したモンスターも魔王の意思から解放され、表情にも普段の穏やかさが戻つてきました。「これは奇跡か!?」などと感心し、男に何

者かと問い合わせるブラス老に、アバンは懐から取り出した巻物を見せ付けました。（これさえ無ければ、大した男なんだけど……）

勇者の育成ならおまかせ!!

この道15年のベテラン

アバン・デ・

ジュニアール三世

※ 魔法使い・僧侶も一流に育てあげます

” 私

に連絡下さいドウゾヨロシク ”

あいかわらず、この男のセンスは壊滅的ですね。昔は自分の能力を誤魔化す為、わざと演じているかと思っていました。冒険が進むにつれ、実はこれがこの男の素だと理解した時の事を思い出し、思わず笑いがこみ上げてきました。

アバンは、ブラス老の質問に「ま、ひらたくいえれば家庭教師ですな」と気楽に答えました。予想の斜め上を行かれてしまった、ダイ少年とブラス老は「はあ!?」と答えるのが精一杯の様です。アバンのターンは、まだ続き「正義を守り悪を碎く正義の使徒！ 勇者・賢者・魔法使い・・・！」彼らを育て上げ、超一流の戦士へと導くのが私の仕事なのですっ!!』とノリノリで説明しています。

そこで思い出したかの様に、二人に弟子であるポップの紹介をしました。ブラス老はアバンの名をどこかで聞いた事がある様ですが、思い出せずにいる感じです。アバンはこの島以外が、どんな事になつているのか簡単に二人に説明しました。

ダイ少年は、レオナ姫やロモス王が心配な様子です。アバンはパップニカ王家から頼まれて、未来の勇者であるダイ少年を、眞の勇者として育てて欲しいと依頼された事を説明しました。その最中の事です。ガーゴイルが、此方に向つて襲い掛かつて来ました。

ガーゴイルは島の結界のせいでの、中に入れない様です。アバンはポップを指名し、軽く捻る様にと指令をだします。「俺一人でですかあーーーー」などと言っていますが、ポップも案外と乗り気の様です。火炎呪文^{ラゾーマ}を放ちまずは、一匹を黒こげにしました。

ブラス老は少年なのに、強力な魔法を扱える事に感心している様です。（もしかしたら、教えたアバンに感心しているのかも知れません）ですがこのまま進まないのが、ポップクオリティです。もう一匹のガーゴイルの放つた呪文^{マホトーン}封じに、あつさりと引っかかり呪文を封じられてしまいます。

その隙にガーゴイルはポップに向つて、剣を振り下ろしました。間一髪のところでダイ少年が、カバーに入り相手の剣をナイフで受け止める事に成功します。ガーゴイルとダイ少年の斬り合いが続いてい

ますが、間合いの問題からガーゴイルに軍配が上がる様です。

ですが、ダイ少年には私が教えた《波斬り》があります。離れた所からでも攻撃出来る技なので、間合いの問題を気にせず、攻撃が行なえます。技を放った途端に、あつと言う間にガーゴイルは真っ二つになりました。おまけに後ろの海まで切り裂いた威力に、さすがのアバンもビックリした様子です。技が自分の《海波斬》とそつくりな事に思わず、アバンはダイ少年に問い合わせていました。

ダイ少年は無邪気に「ちよつと前に、島にやつてきたお姉さんに教えてもらつたんだ！」と答え、プラス老が補足する様に、「光輝く剣を持った、凄腕の女剣士でしたじや。名前はロツテ殿と言つておつたかのう」とアバンに説明していますが、アバンは何事か考えている様子でした。

プラス老が不審に思い、アバンに向つて「アバン殿どうかしたのかのう」と話かけました。そこで気が付いたのか、アバンは正気に戻つた様に「何でもありません」と言つてダイ少年に向つて、「その女性に他に何か、教わつたのかい？」と聞いています。

ダイ少年は、「うん！」と言つて近くに在つた大岩に向つて、《岩石切り》と言つて、ナイフで斬りつけました。大岩は轟音とともに、真つ二つに切断されました。それを見たポップは、開いた口がふさがらないと言つた感じで、大口を開けています。

ダイ 特訓!! ☆2

『特別ハードコース』今回ダイ少年が受ける特訓ですが、1週間で勇者になれると言われるとても厳しい育成法のはずでした。話を聞いたポップはその修行法を知っている為、全力でダイ少年を止めるに掛かつたぐらいです。

本来であれば、未来の勇者たるダイ少年とて苦戦を免れない修行法です。背中に40kgの重りを背負つて、島を一周から始まり、畑を耕したり素振りの訓練をしたりといった基礎的な訓練（牛乳配達はしませんよ♪）から魔法の習得、モンスターの生態を学んだりといった授業を経て、1日の終わりに80kgの重りに変更して島をダッシュで一周して終わりといったことが行なわれる予定でしたが、私が教えた時にアバンがやりそうな事は仕込み済みです。

特訓の目標として、大岩に斬りかかり岩を切断する（1日目）海を剣圧だけで割る（2日目）はすでにクリアしているので、剣術や格闘と言った部分や、魔法講義など原作より濃密な修行がなされました。その結果この段階でダイ少年は、メラやヒヤドと言った基礎的な魔法を習得する事が出来ています。

今後の展開上、多少原作より有利に働く事でしょう。もしかしたら、アバン流刀殺法の中で至難とされている空の技『空裂斬』も早期に覚えられるかもしないですね。ポップが隠れて見守る中、アバンとダイ少年が木刀を使った訓練をしています。ダイ少年の上達具合にはさすがのアバンもタジタジです。打ち合う中で、とうとう両手を使わされてしまいました。

アバンは弟子の上達具合にホクホクの様子で、「私のスーパーな必殺技です。一日も早くマスターして下さいね・・・!」と言つて奥義であるアバンストラッシュをダイ少年に向けて放ちました。

ダイ少年は数十メートル程ぶつとばされて、隠れて見ていたポップに抱き止められました。「先生…無茶しそぎですよ。いきなり奥義なんて!!」とポップはアバンに、詰め寄っています。アバンはとぼけた口調で、「ポップ居たのですか?ダイ君が心配なら貴方も特別ハードコースを受けても良いのですよ～～♪」と言つて、ポップが口ごもつている隙に追撃をさらりとかわしました。

アバンが話題を変える様に、ポップに向つてこう言いました。「ちようどダイ君に、対魔法戦闘を教えたいくつていったところです」と言つてアバンは、自分に向つて火炎呪文^(メラゾーマ)を擊つように指示をしました。ポップはまだ何か言いたそうでしたが、指示通りに火炎呪文^(メラゾーマ)をアバンに向けて放ちました。

アバンに向つて巨大な火の玉が襲い掛かつて来ましたが、『海波斬』で火の玉を切り裂いて無効化しました。「ざつとこんなカンジですね♪」と言つてダイ少年にもやつて見る様に促しました。ダイ少年も、火炎呪文^(メラゾーマ)つてどのぐらいの威力なんだろう?って顔をして、いかにもヤル気マンマンな状態です。

その様子に、諦め顔のポップは、ダイ少年に向つて火炎呪文^(メラゾーマ)を放ちました。それを余裕な表情で切り裂いて見せたダイ少年は、ポップに向つて爆弾発言をしてしまつたのです。

「ポップさん、手加減して呪文のランク落とさなくて大丈夫だよ」とその発言を聞いていた私は、口止めを忘れていた事に今更気づいたのでした。

ポップは不審な顔をして、「ポップって呼び捨てで、かまわないよ。おれもダイと呼ばせてもらおう」と言い更に「別に俺は手加減なんかしていない……『メラゾーマ』は火炎系最強呪文だ」とポップ言

い、授業で習つただろう的な感じで、ダイ少年を見ています。

「えつ、火炎系最強つて遺失火炎呪文^{メラガイア}じゃないの？あの呪文だと、パワーに圧されてまだ切れたことないんだよねー」と言つたダイ少年の発言に、ポップは聞いた事も無い呪文に猜疑的な様です。

「お姉さんのあの呪文に慣れたら、《メラ》も《メラゾーマ》も一緒にだよ」と、今までの常識をブチ壊すダイ少年の斜め上の発言に、ポップは心底驚いていた様子です。アバンは何か思いついたのか、ダイ少年に質問をしました。

「ロツテさんでしたか！？教えてもらつたダイ君を見て、いれば解りますが、相当な剣士の様ですね。しかもポップより遙かに強力な魔法の使い手なのですか？」アバンは自らの疑問を解決する為に、魔法に詳しく現場を見ていそうなプラス老に話かけた。

「残念ながらわしは、ロツテ殿が魔法を使つていたところを見たことがないのじや」と返事をし、ダイ少年がお姉さんは「スペシャルな魔法だから、ダイ少年だけに見せてあげる♡」つて言つてた事を思い出し、アバンにそう伝えた。横からチャチャを入れる様にポップが『スペシャルな魔法』とか表現がなんか、先生みたいですね」といつて面白がっています。

「その女性について、何か覚えていることはありませんか？」アバンはポップの発言をスルーして、プラスとダイ少年に話かけました。その時、遠くの方から雷が落ちたような音が、数回聞こえてきました。ただ事でない様子に会話を中断して、辺りを窺うアバンとダイ少年でした。が遠くの方から、ものすごい勢いで迫つてくる物体に気が付きま

した。（とうとう奴が来るタイミングになつた様です。）

魔王の出現・・・!?

アバンの話が始まる少し前の事です。私は直接見てはいませんが、たしかこんな場面が原作にあつたはずです。デルムリン島の近くで魚を獲っていた漁師二人が、急に天候が悪化した事から帰るか漁を続けるのかで話し合っていました。魚が捕れていない事から続行しようと言った漁師と、引き返そうと言う漁師がふと隣を見ると黒いフードを被つた何かが海の上に立っています。

「海の上に・・・に人間がつ・・・!!!」そんな呻き声に気がついた黒フードは、ニタアと笑つて「この島か・・・探したぞ！」と言いながら島に向つて何かの魔法を発射・・・漁師は巻き込まれて、海の藻屑（原作にそんな描写はありません！）といったのが流れだつたはずです。

可哀想な漁師（だからそんな話はないんだってば!!）の話は置いておいて、原作ではアバンが火竜変化呪文を使つてダイ少年に襲いかかっているタイミングです。ドラゴンの炎を《海波斬》で切り裂いて、会得する流れです。ポップに無茶しすぎですと怒られているアバンが、ガーゴイルをやつつけた時に後ろの海を切り裂いていたから、いきなりドラゴンの炎でも大丈夫だと思ったなどとポップに話して呆れられている場面です。

今回は修行が原作より進んでいることもあつて、火竜変化呪文を使つた特訓ではなく、攻撃魔法を擊墜するといったより実践的な訓練になつています（対人戦重視？）アバンがドラゴンに変化することなく魔法力が温存されていることが、今後の戦闘にどう影響するかは私にも解りません。

本題に戻りますが、現在の状況としてはハドラーがデルムリン島を発見♪↓なにかしらの魔法で攻撃した→マホカトルで弾かれる→強制的に結界に侵入→目的の人物を探して島を徘徊♪アバン達と対峙といった場面が今現在となります。

「クツクツクツ…貴様の魔法陣にはなかなか骨を折られたぞ!!」
いきなりやつて来た謎の存在、不確定名称『黒フードの男』（命名・私がアバンに向つて話しかけています。ダイ少年やポップから見れば、正体不明の黒フードが空に浮かんでいるといったところですが、アバンには当然のことく見覚えがありました。

アバンは、ある程度予想していたのでしょう。意外に冷静に相手に話しかけています。「やはり復活していたか…魔王…魔王ハドラー!!」そんな一人を目の前にして、ダイやポップはいきなり魔王が現れた事にビックリしている様子です。

ハドラーの正体・・・!!

ブラス老は、魔王と呼ばれた男を観察しているようです。この中でアバンの次に魔王について知っているのは、旧魔王軍に所属していた鬼面導師ブラスなのです。（おそらくパワーが段違いだと、若いとか、生命力を感じるとか思つていてことでしょう）

ブラス達の事など眼中に無いような様子のハドラーは、目の前の男にのみ注意を払つてゐる様です。「久しいな・・・我が宿敵・・勇者アバンよ！」思つたより静かな口調と声に、私は違和感を感じました。

本来であればここで、俺の野望を邪魔したとか屈辱は忘れんとか、ちつちやいことを言つてアバンと言い合いになつていた気がするのですが何か様子が変です。

「かつての俺は、貴様ら人間の力を軽視していた。何の戦略もなしに、力押しでどうにかなると思いこんでいたのだ。その結果、お前達の歴史書通り俺の敗北に終わつた！・・それはいい!!しかしその結果、人間共は増長し、魔物を駆逐し自然を破壊した。人間の王国は当時の理想を忘れ、王国内部は腐敗し、この島の様に都合の悪い人や魔物を辺境に押しやつた!!これが貧民を生んだ歴史である!!」（・・あれれ：：まつたく私の知らない方向に話が・・・・・）

アバンも自分が知つてゐる短気で粗暴な男ではなく、どこか知的な感じすら漂わせるハドラーに動搖を隠せない様子である。

ハドラーの演説はまだ続いています。「ここに至つて俺は人類と魔物が今後、絶対に戦争を繰り返さないようにすべきだと確信したのである!!それが貴様に倒された俺が、復活し貴様に相対してゐる理由でもある。本来であれば俺を倒した貴様に敬意を表して、滅んでおくべ

きであつたのだが・・・人間の増長振りに我慢ならん!!　おそらく貴様はまた俺の敵に回るだろう。だから宣言しておく勇者アバンよ!!

一旦セリフを切つてからハドラーは、その身から威厳や誇りといった前世ではありえない雰囲気を纏いながらこう宣言した。

「我が魔王軍は、全世界の王国に対して宣戦を布告する!!」・・・・
誇り高き魔族の王がそこに居た。

「貴様程の男が意見を変えるとは思えんが、念の為に聞いておこう」とハドラーは言い、アバンに先程の話に協力する気がないか返答を求めました。案の定アバンの答えはNOでしたが、最後にこう呟いていました。「言いたい事は解らなくはないが、人間はそれだけではないのですよ」

「残念だが・・・これも必然か!」ハドラーは、言葉とは裏腹に断られた事に嬉しそうな表情をしていました。「やはり勇者はこうあるべきだな! もはや何も言うまい!!」そう言つて戦闘態勢に入るハドラーとアバンですが、私には言いたいことがあります。(ハドラーキャラ
変わりすぎww)

「では前回の戦い続きといこうか・・・前回は俺の敗北で終わつたが、今回はどうかな?」そう言いつつも、自らの勝ちは揺るがないと感じさせるだけの何かが、今のハドラーにはあつた。「貴様は老い、俺は若返つた・・・頼りになる仲間はなく、周りには守るべき生徒がいるだけだ」ハドラーは若干悲しそうな表情で「それでも俺は、貴様と教え子をこの世より葬り去らねばならぬのだ! せめて我が手での世に行くが良い!!」

そのセリフと共に戦闘が開始された。ハドラーが、様子見とばかりに放つた爆裂^{イオラ}呪文をアバンが相手の魔力を中和して消滅させる、超高

等技術で無効化しました。アバンも反撃とばかりに閃熱呪文を放ちましたが、ハドラーのローブを燃やしただけで、ダメージは入っていない様子です。

「悲しいなアバンよ！技術や威力は昔以上だが、今の貴様には何としても相手を倒すという気迫が足りない！」そう言つてハドラーも閃熱呪文をアバンに向け放ちました。アバンは《海波斬》で迎撃しましたが、呪文の威力に押され、ダメージを受けてしました。

「凄まじい威力だ……以前戦った時よりもはるかに強くなつている……なぜだ!!」

そう呟くアバンにハドラーはこう言いました。「貴様に倒された後、俺はあるお方の力で再びこの世に蘇つたのだ！以前よりも遥かに強靭な肉体を与えられてなつ!!」

「何物だ!? そいつは……!!」アバンは思わず、そう叫んでいました。ハドラーはアバンの問いに、こう答えました。「大魔王バーン……貴様に敗れ、死の世界をさまよつていた俺を蘇生させて下さつた、偉大なる魔界の神だ!!」

そして、アバン達が予想もしていない事が、ハドラーの口から発せられました。「バーン様に忠誠を誓つた俺は、大魔王の片腕として魔王軍の全指揮権を与えられたのだ!!」ダイヤポップはショックを受け、動搖している様です。さすがのアバンも絶句し、言葉を発することができない様子です。

「今の俺は魔王ではない……バーン様の全軍を束ねる総司令官… !! 魔軍司令ハドラーだ!!」

対決!!ハドラー対アバン

絶句しているアバンに対しハドラーは追討ちのどく、更なる事実（ハドラーはそう思っている）を語ります。「大魔王バーン様こそ、我が主君にして全知全能の魔界の神！その軍勢はかつての魔王軍とは比較にならんほど強大だ!!」と言いアバンに向け更にこう言い放ちました。

「そしてバーン様は、慎重な御方だ。人間の中でも要^{くせ}注意^も人物である貴様の抹殺を俺に命じたのだ!!残念だが貴様が仲間にならない以上は、貴様と弟子達をこの世から葬り去らねばならんのだ!!」

ハドラーも未練を断ち切る様に、戦闘態勢を取りました。「貴様を葬るのに生半可な呪文では、足りないだろう!?」そう言つて両腕に魔力を集中し始めました。アバンもその魔力量から危険を感じ取ったのか、奥義であるアバンストラッシユの構えを取っています。二人の溜めが終わつた瞬間に、攻撃が始まりました。

極大爆列呪文

アバンストラッシユ！

お互いが放つた一撃は、大半の部分が相殺された様です。されなかつた部分が、二人にダメージを与えた様です。アバンの攻撃はハドラーの肉体に多少の損傷を与えましたが、それほどの効果的とは言えない様子です。逆にアバンの方は体から煙が立つており、全体的にダメージが深いのは誰の目にも明らかでした。

そのことでポップに止められていたダイ少年の我慢が限界に達したのか、二人の間に割つて入りました。ダイ少年はハドラーに向つて「今度は俺が相手だ!」と言つて、レオナ王女から貰つたパプニカのナ

イフで、攻撃を仕掛けます。思つた以上の攻撃にハドラーは若干ビックリした様子ですが、冷静に対応しています。

ハドラーが防御に回つて、ダイ少年を観察しています。そして、ダメージで動けないアバンに向つてこう話掛けました。「アバンよ、おそろしい逸材を見つけたものだな！　あと数年修行すれば俺を倒せたかもしけんが、だからこそ生かして返す訳にはいかないな!!」と言つてダイ少年に向つて、極大爆列呪文の構えを取つています。そしてダイ少年はといえば、構えから見ておそらくアバンストラッシユを放とうとしている様です。

アバンはダイ少年に逃げる様に言つていますが、集中状態に入つた彼にはまったく聞こえていない様です。二人の溜めが完了し、先程の光景が再現されます。

極大爆列呪文
アバンストラッシユ!!

ダイ少年の一撃はハドラーの肉体に小さくない傷を残しましたが、致命傷とまではいかなかつた様です。対してハドラーの一撃は、ダイ少年に多少ダメージを与えたに過ぎなかつたのですが、これを予期していたのかハドラーは間髪いれずに、第二撃を放つ準備を開始しています。

「油断したなアバンの弟子よ!!」そう言つてハドラーは、火炎呪文をダイ少年に向け放ちました。ハドラーの放つた一撃は、ダイ少年に目掛けて一直線に向つて行きます。ダイ少年は、はじめてのアバンストラッシユの反動かはたまた《イオナズン》を無効化したことに油断したのか解りませんが、体勢が完全に崩れています。

このままでは直撃をもらい、大ダメージを受けることは間違いあり

ません。とはいえた今のダイ少年には、防ぐ手段はありませんでした。
あわや直撃かと思った瞬間、アバンが身を挺してダイ少年を庇つたの
でした。

アバンのしるし 前編

庇つたアバンは、その場に倒れまったく動けない様子です。何とか意識はある様ですが、体が思つた様に動かないといった感じです。「先生!!」と言つて慌てて駆けつけて来たダイ少年が、回復呪文をアバンに向つて唱えました。なんとこの世界線のダイ少年は、回復呪文を使用出来るまでに成長していたのです。

「^ホイイミングのお陰で辛うじて動ける様になりましたが、半死半生といつた方が相応しい姿です。

「我ながらベリーナイスタイミングでしたね・・・！」アバンはダイ少年の危機を救えたことに満足しているようですが、ダイ少年は今にも泣き出しそうな表情でアバンにこう問いかれます。

「先生大丈夫？^ホイミング、覚えたばかりでまだ上手く使えないんだ。痛むでしょ？」そんな様子に、自分の生徒の成長具合にビックリしながら、生徒に心配をかけない様におどけて答えました。（流石に人の心までは読めませんので私の空想になりますが、そう大きくはずしていいでしよう・・・・・）

「フフフ・・そりや痛いんですけど、痛がつてている場合じゃありませんからね」と答え、まるでダメージを受けて無い様に立ち上がりました。（相當なやせ我慢ですねあれば・・・）立ち上がったアバンは、ハドラーと対峙する為に正面に立ちました。ハドラーと対峙しつつ、アバンはダイ少年とポップに話かけます。

「奴のパワーは、かつて魔王だつた時以上・・！ しかもその上には大魔王がひかえるというんですからね・・・!!」二人を見渡しながら、アバンの話はまだ続きます。

「敵は私の想像を遙かに上回る存在でした。今の我々の戦力では勝てません．．!!だからこそ奴だけは．．魔軍司令ハドラーだけは、私がこの場で倒します。!!」

そんなやり取りを黙つて見守つているハドラーに向つてアバンは「待たせましたね」と短く言いハドラーも「気にするな！ どちらにせよ、師弟共々葬ることには変わりはないのだからな!!」と言つて戦闘体勢を取ります（そんなセリフとはうらはらに、残念そうな表情を浮かべていると感じたのは私の穿ち過ぎでしようか？）

「あの子達は、人類の希望です。ここで潰させる訳にはいきませんよ!!」と言つてアバンは、鋼鉄^{アス}変化^{トロ}呪文を唱えました。

『アストロン』の効果で、そこに居たダイ少年やポップ、プラス老やゴメちゃん（この二人は最初から居たが空氣化してしまつていた）が次々と鋼鉄と化して行きます。ダイ少年が「先生．．！おれも．．！」などと言つていますが、呪文の効果により鋼鉄化していきました。

そうしてアバンは「これでみんな安全です。私の最後の戦いを見守つていて下さい．．」と言い胸から宝石の様な物を取り出しました。ポップが「アバンのしるし．．卒業の証．．!!」と言つて絶句しています。

アバンのしるし 後編

そうしてアバンは二人に、最後の別れの言葉を掛けていきます。まずダイ少年の目の前に立つて「ダイ君、貴方は素晴らしい素質に恵まれています。修行が途中で中断してしまったのは残念ですが、この先もし『お姉さん』に会うことがあつたら、修行をしてもらつて下さい。更なる高みに達することが出来るでしょう。貴方なら立派な『勇者』に成ることは私が保証しますよ・」と言つてアバンのしるしを、ダイ少年に首に掛けました。（やつぱり私だとバレましたか？）。あなたの遺言は、私が引き受けましょう）

次ぎにポップの前に来ましたがポップが「いやだ・・・いやだよ！そんなのいらないよ・・・」と言つています。流石のアバンも困り顔です。更にポップは「勝てないって解つてている相手に、なんでそんなムチヤするんだよ・・・」最後の方は嗚咽になつていきましたが、意味は通じたのでしょう。

アバンはポップに「勝てない相手だからこそ・・・命をかける必要があるのです。それにねポップ、やはり修業で得た力というのは他人のために使うものだと私は思います。たぶん私の力はこの日のために・・・あなたたちを守るために神様からさずかったのでしょうか・・・いつかあなたにも必ずわかる日がきます。だからその時の為にこれをあずけておきましょう・・・」と言つてポップにもアバンのしるしを掛けてあげています。

そうしてアバンは最後に「とは言え、二人はまだ仮免中といつたところです。そんなに感動してもらつちゃこまりますよ。これからもブリバリ努力してくれないと、それにふさわしい勇者になれませんからね！」と得意のユーモア（センスが良いとはいっていない）で場を和ませます。

そして、通りぎまにブラス老に向つて何か言つていますが、この位置からは聞こえません（内容が多少気になりますね・・・）この間、ハドラーは無言のままアバン達の様子を窺っています。そうして別れが済んだタイミングで、アバンに声を掛けます。

「別れは済んだか、勇者アバンよ！」その返答とばかりに「何があつたか知りませんが、あの時の魔王とはまつたくの別人ですね・・・」と感慨深げにアバンは、ハドラーに向けて話しかけます。対するハドラーというと、特に気にした様子もなく「たいして変わらんよ！ 結局お前を殺した後に、弟子もあの世に送ろうとしている外道よ！」と自嘲気味に返すハドラーでした。

しかし、アバンは「貴方には、15年前には感じなかつた凄みの様なものを感じます。ここで止めなければ、人類すべてに最悪な結果になる予感が・・・被害が最小限の内に、貴方は命にかえても私が倒します！！」

そう言つてアバンは、ハドラーに向けて猛攻を仕掛けます。15年前よりかなり鋭さを増した太刀筋で、連撃を繰り出します。正直思つた以上にアバンの一撃、一撃にパワーが乗つており、昔のハドラーなら瞬殺出来るのではといった感じです。（はつきり言つて何があつた・・・勇者アバン）

対するハドラーは、そんなアバンのパワーアップにも十分に対応出来ています。アバンも研鑽を怠つていなかつた様（どんな修行をしたのですか!？）ですが、ハドラーのパワーアップが上回つており、両者の差が思つた以上に開いてしまつた様です。

肉体スペックに差がついてしまつたとしても、以前の小物つぶりまるだしの田舎魔王（我ながら酷い言い様ですね）でしたら勝負はもう

少し、接戦になつたかもしません。ですが今のハドラーには、そういった要素はまるで感じられません。あくまで冷静に対応している様子がここからでも窺えます。

アバンの攻勢に若干の疲れが見えて来たところで、今度はハドラーが猛攻を仕掛けます。アバンも何とか耐え忍んでいますが、捌き切れず細かいダメージが蓄積していきます。そして何度も捌いたか忘れたころに、猛攻に耐え切れなくなつたか、体勢を大きく崩してしました。

とうとうハドラーに向け、致命的な隙を作つてしまつたアバンでしたが、それ自体が誘いだつたのです。ハドラーが好機と見たのか、大きな一撃を放つて来ました。自らの命を廻としてようやつと、ハドラーとの間合いを零距離まで誘導する事に成功しました。

完璧なタイミングでした。流石のハドラーも意表を突かれ、自ら放つた一撃を止める事が出来ません。そうしてアバンは、自らの生命エネルギーを爆発力に転化し相手に叩きつける呪文である『メガント』をハドラーに直撃させることに成功しました。

ダイ激怒!!!

アバンの命がけの魔法^{メガンテ}……たとえ魔神であつてもかわせないと思われる見事な攻撃でしたが、私はそれすら致命的な一撃にならないことを知っています。そんな命がけの行動を見ていると、単純にアバンの仲間として、戦場に立つていられたらと思つたりします。それが偽善であることを、もちろん私は知っています。^{ジジイ}神に復讐することを誓つたあの時に……バーン様の誘いを受けてしまつたあの時から……そんな資格は私にはありはしないのですから……

そんな感傷は置いておいて、最後の瞬間にアバンが何か呟いた様に聞こえました。しかし、ここからではうまく聞き取れませんでした。非常に気になるところですが、現場が物凄いことになつており、それどころではありません。周囲を物凄い爆風が吹き荒れ、破壊力の凄さが伺いします。

ダイ少年とポップ達は呆然としており、状況が理解出来ていない様子です。しかし表情から、アバンの死はおぼろげながら感じている様にも窺えます。

「先生が…先生が命をかけて守ってくれたのに…なんにもできなかつたなんて…！」ダイ少年が呆然とした表情で、言葉を搾り出す様に呟いたのが聞こえてきました。その後、瓦礫の下から多少のダメージは負つた様ですが、比較的軽症らしいハドラーが這い出て来ました。

「見事な散り際であつたわ！勇者アバンよ!!」そう言いつつハドラーは、爆心地を見つめています。ですがその行為もわずかな時間のことです。己の任務を思い出したのかダイ少年達に方に近寄つていきます。歩きながらハドラーは、攻撃魔法^{ラゾーマ}を展開しています。通常よりも

くの魔力を注ぎ込んで、威力の底上げを図つてゐる特別版です。

本来であれば魔法を使つた戦闘の場合、使う魔法の威力と、魔力を注ぎ込む時間とのバランスを取つて攻撃します。威力が少な過ぎたら効果がありませんし、チャージ時間が多すぎると相手に先に攻撃されてしまいます。それらを瞬時に見極めながら、攻撃することに魔法戦闘の極意があると私は思つています。

しかしハドラーは、それを無視して限界ギリギリまで魔力をチャージして、確実にダイ少年達を葬り去ることを選択した様です。もちろん鋼鉄変化呪文^{アスロトロ}の残り時間も計算に入れて、解ける瞬間に最大出力で放つ心算でしよう。

本来であれば、「俺の火炎^{メラ}は地獄の炎！」とか「相手を焼き尽くすまでは決して消えん!!」とか言つて油断しまくつてゐる場面ですね。そして竜^{ドラゴニックオーラ}闘氣^{オーラ}全開で、鋼鉄変化呪文^{アスロトロ}を破つて自由になつたダイ少年に、苦戦しまくつて逃げ帰ると言うのが本筋になります。

ですが、このハドラーは私の知つてゐる三流魔王とはレヴエルが違います。油断や驕りといつたマイナス面をどこかに置き忘れてきたのか、詰将棋の様に確実に止めを刺しに來ています。これでは流石のダイ少年でも形勢は不利ですが、この物語での主人公補正とも言うべき竜^{ドラゴニックオーラ}闘氣^{オーラ}が発動する兆しが見えます。

これで、DEAD ENDフラグは回避できそうです。（ダイ少年には日記を書く趣味はないようですが）・・・・話がまた脇道に逸れてしましました。

鋼鉄変化呪文^{アスロトロ}を自力で解除したダイ少年と、呪文をキヤンセルしたハドラーが、激しく打ち合つています。互角の勝負を繰り広げている様に見えますが、わずかながら勝利への天秤はダイ少年に傾きかけて

います。ハドラーにもそれが感じられたのか、大勝負に出ようとしているのが気の高まりで感じられます。

結果だけ言えば、原作より自力がアップしているダイ少年のストラツシユ（竜闘氣版）がハドラーをぶつ飛ばし、キメラの翼を使って離脱すると言つた流れは変わらなかつた様です。仮定は変わつても結果は集束すると言うことなのでしょうか。

私も今頃海に漂つてゐるであろうアバンを回収して、離脱することにしましよう。回収後浜辺にでも置いておけば、弟子達の旅立ちを見届けながら修行の旅に出ることでしよう。私が改良・強化した潜伏呪文レムオルを解除し、さつそく行動に移ります。

私にもやることが出来ました。魔界に一旦帰還し、今回のことを見バーン様に聞いてみることにしましよう。今回の相違が、今後の予定に影響しなければ良いのですが・・・

大冒険への旅立ち!!

s i d e ハドラー

ようやつと鬼岩城までたどりついたが、思ったより手ひどくやられてしまつた。流石は勇者ダイといつたところだろうか!?何年前になるだろうか??前世ではただのサラリマーンであつたはずだが、気がついたらこのとんでもなく死亡フラグ満載なダイの大冒険の世界に迷い込んでしまつていた。

正直いつてやつてらんねーと思つた。この世界での最初の記憶が、アバンによつて止めを刺される瞬間つていうのが、情けなくて笑えてくる。その後、魔界の神?大魔王??だかに命を助けられたが、しばらく力を蓄える為に眠りについていた。起きたら起きたで、世界征服をしなくてはならないらしい。

残念なことに原作を読んでおらず、話自体まったく分からなかつた。登場人物だけなんとなく記憶していたが、どんな物語なのかなはさっぱりだつた。とにかく魔軍司令といつた地位を拝命してしまつたからには、魔王軍とやらを指揮して、世界征服とやらをなしとげなくてはならないと思う。

一応復活させてくれた恩義もあることだし、義理を返すまでは働くなくてはならないと思う。恩返しの一環でデルムリン島に遠征したのですが、ギタギタにやられてしまつた訳です。ダイから見れば師匠の仇な訳ですからこれから合うたびに、攻撃が相当ハードになりそうで気が重いです。

まあなんとなくの記憶で、アバンがラストっぽいところで登場していたので最終的には問題はないと思いたい。問題があるとすれば、名

前を知つてもハドラーの性格まで知りはしないということです。なんとなくそれっぽいセリフを言つておけば、旧知の相手でも「まかせるかなあー?」なんて思つたが、アバンにはかなり怪しまれてしまった。

そんなことを考えながら、両腕切断を修復中です。それで治るんだから、魔族つて便利な体に出来ていますね。そういうしていると、の方から通信が入りました。

「手ひどくやられたな……ハドラー」と相手はそう言つてきたので、私はいつもの様にハドラーっぽい口調でこう返答します。「申し訳ございません大魔王様。お見ぐるしい姿をお見せしてしまいました……」そう言つて恐縮してつぽい演技を交えて話すと「まあ気にやむことはない。勇者アバンを葬った功績を考えれば、名誉の負傷というところであろう……」そう言つている大魔王様は、機嫌が宜しい様だ。

バーン様からの通信が終わつたのは良いが、これからの方針を決めなくてはならない。「かつて成し遂げられなかつた世界征服の夢をかなえるがよい」などとバーン様は言つていたけど、別に世界征服なんて興味ないんです。ですが、正体がばれない程度には動かないといけない訳ですし……さてどうしたもんどううか?

とりあえず何をするのにも情報は必要と思うので、世界各地に放つてゐる悪魔の目玉にダイを搜索させよう。あとは報告を待つだけにしておいて……魔王軍自体は規定戦略に従つて、各軍団長がすでに各王国に侵攻中なので今更俺が出るまでもない。ダイ達を発見したら、その地域担当の軍団長に、命令を送つて倒してもらおう。

なんとなく、主人公補正の掛かっている勇者ダイの肥やしになりそうな気もする。適当なところで、やられたふりでもして戦線離脱する

のも手かもしれない。とりあえず、ある程度成果を残し恩を返したら真剣に考えよう。

そんな事を考えていたら、ダイ発見の報告があつた。マジ目玉優秀!! 口モス王国外縁部ということは担当は『獣王クロコダイン』か・・・・・昔ながらの武人肌で、実力はあるが真っ直ぐすぎるのが玉に瑕といったところだ。やっぱりダイの踏み台1号決定な気がする。こうなつたら、撻破りの開幕ド○グ・スレイブならぬ開幕『竜騎将バラン』でも投入してみようか?

でも彼は激戦区であるカール王国に出撃中だし、むやみに動かすと大魔王様の不審を買う恐れがある。やっぱり現状維持しかないか・・・・・クロコダインにはぜひとも頑張ってもらおう。

第2部 口モス王国編

魔の森のマアム

s i d e ダイ

おれの名はダイ。大魔王を倒す為、ポップと共にデルムリン島を旅立つてから数日が過ぎた。口モスの王様なら、レオナのいるパプニカの場所も知っているはずだと思い、口モス王国を目指していた。レオナなら事情を話せば、協力してくれるとと思う。

デルムリン島から比較的近いこともあり、『偽勇者事件』の時にキメラに乗つて、口モスの王様がいる城に行つたことがあつた。今回も簡単に行けるかと思ったが、実際はどうとポップと二人で迷子になつてしまつた。

行けども行けども森ばかりで、正直こまりはててしまつていたんだ。そんな時に向こう側から悲鳴が聞こえてきたので、ポップと一緒に悲鳴のした方向に向つて走つた。そうしたら小さな女の子が、モンスターに襲われているのが見えたのでおれとポップで撃退したんだ。

モンスターを全部やつつけて、女の子に話を聞こうとしていたら、どうやら一匹仕留め損ねていたらしい。完全に背後に回られ、逆に流れ達がピンチになつてしまつた。

そんな時、向こうの方からやつてきた火の玉がモンスターに命中した。一瞬お姉さんかな!?と思つたけれど、あの人人が放つた火炎呪文

だつたら、今頃あのモンスターは塵一つ残っていないと思う。実際は
というと、火の玉が命中したモンスターは思ったより元気そうに逃げ
ていった。

後ろから現れたのは、ピンクの髪をした女人で、右手に見たこと
もない武器っぽいものを持っていた。女の子が嬉しそうに『マアムお
姉ちゃん』と呼んで抱きついている。女の子が事情を説明すると、女
の人に無茶苦茶感謝されたが、こちらも助けてもらったのでお互い様
だと思う。

この時、ポップと女人で多少の言い合いになつて、ポップが間
違つて女人の胸を触つてしまつた。報復に平手打ちをくらつてしま
つたポップであつたが、後にこのことが影響してくるなんてこの時
点では考えもしなかつた。

お互に自己紹介をした（ポップの分はおれがしておいた）女人の
の名前はマアムと言い、この先のネイル村の住人だそうだ。マアムは
ここが『魔の森』と呼ばれる場所で、モンスターが徘徊していること、
複雑な地形で迷路の様になつていることを教えてくれた。マアムの
住んでいネイル村は近くにあり、そこに泊まつていけばと言つてくれた。

出会つた時に揉めたのが尾を引いていて、このまま王宮に行こうと
ポップが強引におれを引きずつていつてしまつた。「意地でもぬけて
やるからなーーー!!」と気合が入つてポップだつたが、結局何時
間も彷徨うはめになり、やつぱり村に泊めてもらつたほうが良かつた
なあとしみじみと思つた。

獣王!!クロコダイン

side ハドラー

クロコダインに連絡を入れる為、悪魔の目玉に回線を繋ぐ様に命令を出した。この世界の通信手段として、人間は書簡を馬車や船といった交通手段を利用して送るか、頑張つても魔法使いがルーラを使って届けるのが最速であろう。魔王軍はどうしているかというと、悪魔の目玉を利用してリアルタイム通信が可能となっている。こと情報の共有と言つた点においては、圧倒的有利な状況と言えるだろう。

呼びかけてしばらくすると、クロコダインの声が聞こえてきた。そこで本題に入る前に、口モス王国攻略の現状を報告してもらつたが、予想どおり獣王にヤル氣が感じられなかつた。弱兵ばかりだと侮つていて、部下にまかせつきりだそうだ。俺は心の中で『やれやれだぜ』と思ひながら本題を切り出した。

ダイの抹殺を指示し姿を悪魔の目玉で見せたら、こんなガキの相手をさせるのか？とか冗談もあるだろう？などと大いに笑われてしまつた。前から思つていたが、魔族とかモンスターとかいう方々は人間を馬鹿にする風潮がある様だ。戦う相手を侮つて、一銭の得にもならないだろうと俺は思うのだが・・・・。

人間を外見や行動で決め付けることの危険性について、クロコダインにダイに付けられた傷を見せて注意喚起を行なつた。獣王も話を聞く気につれ、最初のバカ笑いしていた表情から真剣な表情へと変わつていつた。

ここぞとばかりにダイの実力を存分にアピールして、クロコダインの殺ル気を煽りまくつた。その結果、獣王のテンションはうなぎ登りで、ダイ討伐を引き受けてくれた。くれぐれも油断しない様に言い聞

かせたが、どうせどこかで失敗するであろう。

魔王軍には6つの軍団があり、モンスターはタイプに合わせて各軍團に配属される。獣王クロコダイルが軍團長を務める《百獣魔団》には獣系のモンスターが配備されているが、作戦や計略といった頭脳労働を担当出来るモンスターは配備されていない。そのことも俺の不安を増大させている要因の一つと言えよう。

魔軍司令としては、頭の痛いところはある。下手にモンスターの配置をいじれば、各軍團長の反発を買う可能性がある。この状況を打破する手段を色々と考えて見るが、原作の展開や詳しい人物像が解らない為、迂闊に人員を動かせない状況だ。

さらに自分自身（ハドラー氏）のことも分からぬのも問題である。そういった改革や、今後の展開を見通して行動する人物（魔族）なのかも定かではない。次善策を用意したいところだけれど、これ以上余計なことをしても悪化する可能性がある。ここは獣王殿に期待して、あえて放置（現状維持）することにしよう。

獣王のおたけび!!

side ダイ

ポツプに引きずられて森を徘徊していたんだけど、ライオンヘッドに遭遇してしまった。さすがは魔の森つていうだけあって、かなり強力なモンスターだ。切れ目無く閃熱呪文^{ベギラマ}を撃つて来るし足も速くそうとうな強さだ。^{レベル}ポツプは逃げたほうが良いんじやないかと言つているが、このままだと二人ともやられてしまう・・・・・・ 戦うしかない!!

そんな時にどこからともなく、おたけびが聞こえてきた。ものすごい威圧感^{プレッシャー}を感じる。デルムリン島で、モンスターと生活していたが、こんなおたけびは初めてだ!!

その声を聞いたライオンヘッドは、おびえて縮こまってしまった。この声の主はこいつより断然強いってことだ。おれにはプレッシャーの主が段々と近づいて来るのが分かつた!! そうこうしていると巨大なワニ男^{リザードマン}が現れた。ワニ男は獣王クロコダイント名乗り、ハドラーの部下で百獸魔団の軍団長だということだ。

先生の命を奪つたハドラーの部下だつたら、容赦はいらない。全力で倒すのみだ!! ポツプが先制攻撃とばかりに火炎呪文^{メラマ}を放つたが、息だけで吹き飛ばされてしまった。反撃とばかりにクロコダイントが、斧を振りかざした。おれたちは、辛くも回避に成功したが・・・背後の壁に大穴が開いた。

すごい!! パワーだけだつたらハドラーより上かもしれない・・・おれはつつきりこつちの体勢が整わない内に追撃してくると思つていたが、クロコダイントそんな様子はなかつた。「各々が得意とする技においては、ハドラーどのを上回る力があるから軍団長を任せられ

ている」と得意げに話している。そんな中、ポップと連携してあいつを倒す策を考えていたが、いつのまにかに隣にいたはずのポップの姿がなかつた・・・・・・・・そりやないよポップ（ー、。）グスン

こうなつたら一人でも戦うしかない！アバン先生やお姉さんに教わつた剣技を今こそ見せてやる!!クロコダインは見た目からして堅そうだつたので、まずは《大地斬》で様子を見てみることにした。命中はしたが予想通り、クロコダインの皮膚に浅い傷をつけるのがやつとだつた。

「そ、その技は・・・」クロコダインは自分の肉体がナイフで傷つけられたのが信じられないのか、思わずといつた感じで呻いていた。「アバン流刀殺法《大地斬》だ!!」と答えてやつた。

「昔、魔王であつたハドラーどのを倒した勇者の技か・・・」クロコダインは妙に納得した表情で、改めて戦闘体勢をとつた。こちらも傷を与えはしたが、余裕がある訳ではない。クロコダイン相手に、レオナからもらつたナイフが一振りだけというのが不安なところだ。

せめてお姉さんが訓練の時に貸してくれた剣があれば良かつたんだけど・・・・なんでも鍛冶屋になつた友人が、作ってくれた大切な剣だと言つていた。すごい威力だつたので、きっとかなり腕の良い職人さんだと思う。

集え!!アバンの使徒

s i d e ポップ

どうやら俺達は見張られているらしく、悪魔の目玉らしき姿がちらりと見えた。どうせハドラーの手先だろうし、ダイの現在の実力を探るために、あのワニのおっさんを送り込んで来たんだろう。まともにやつて勝てるかどうか分からぬぐらいあのおっさんは強い。

かませ犬つてレベルじやない!!くそったれ・・・・そう思つた時に俺の中である奇策が浮かんだ。思考を進めてみると案外面白い手かもしれない。

あの時・・・デルムリン島で、ハドラーのプレツシャーに負けて何も出来なかつた屈辱を返す良い機会だ!幸い仕込みの必要性も殆どなく、やられた方はムカツク良い手だ!!そうと決まればさつそく実行だ!俺はおっさんの攻撃に合わせて、ダイの意識が逸れた一瞬の隙をついて逃亡を開始した。

これでおっさんやハドラーは俺が臆病風に吹かれて逃亡した様に見えるだろう。タイミングを見計らつて横合いから殴りつけてやろう。まあダイがやつつけてくれた方が一番良いんだろうけど・・・・

一時離脱してタイミングを窺がつていると、さつき逃亡したライオンヘッドが襲い掛かってきたやがつた。今、お前の相手をしている暇はないんだ!!しかし、呪文で倒そうにもこいつはかなり素早さがあり、なかなか呪文を唱える隙がない。逃げながらどうしたものかと考えていたらあの女が、向こう側からやってきてモンスターを引き受けてくれた。

正直助かつたが、問題はあの女だ。一撃でモンスターを倒してし

まつた。逆らわない方が身の為かもしれない……さつきのことも謝つておこう。こっちの事情を説明しようとしたら、まだ生きていたライオンヘッドが怒りの閃熱呪文を放とうとしていた。

女もそれに気が付いた様で、何か筒状の道具で、攻撃したと思ったらまるで火炎呪文で攻撃した様にモンスターが燃え出した。「すげえ武器だなあ」と褒めようと思つたら、女の胸元に光るペンドント《アバンのしるし》を発見した。あまりの予想外の為、興奮してしまった俺は、女の胸を驚掴みにしてしまつたことにまつたく気が付いていた。

二度目ということもあり、女の怒りは頂点に達した様だ。あまりの怒りに、説得と事情説明を諦め逃亡することを選択した。謝罪と説得に掛ける時間がほしいので、ことが終わつたら思い存分怒られることにしようと思う……オレハイキノコレルノカ

s i d e マアム

あの失礼な男を追つて森を進んでいたら、もう一人の少年がワニ男にやられそうになつていた。遠くから見ていた感じでは、少年は麻痺系の攻撃を受けたみたい。若干距離はあるが、魔弾銃を使用して麻痺回復呪文^{アリック}がとどけば助けられるかもしれない。そこで私は、少年目掛けて麻痺回復呪文を撃ち込んだ。射程距離的に厳しかつたが、なんとかとどいたみたいね。何事もなかつたかごとく、少年は動き出して再びワニ男と激しい打ち合いを開始した。

よかつた！なんとか間に合つたみたい。しかし、あの男はこんな少年を一人にしてどこをほつき歩いているのか……こんど会つたらO H A N A S H I と O S H I O K I をしないといけないわね。

そんなことは今は置いといて、戦いの形勢は少年に不利のようね……あの斧、真空呪文系が封じ込められているのか、呪文の威力のせいで今一步踏み込めないみたいね。

「あの斧をなんとかしないとね」……思わずそう呟いてしまったが、この状況を打破する方法を思いついた。今迄どんなモンスターに襲われても使わなかつた、『切り札』を切ることにした。お父さんとお母さんの昔の仲間の人が、何年か前に村に立ち寄つた際に込めてもらつた凍結呪文系呪文……ピンチになつたら使いなさいと言われたが、今まで使わずに取つておいたとつておきよ。あのマトリフおじさんでさえ認める呪文の使い手である彼女の呪文が封じられた一品、これならば……

ワニ男が攻撃のモーションに入つた瞬間に、私は魔弾銃まだんぐンを発射した。

私が撃つたのと同じタイミングで、別方向からも呪文が放たれていったのが見え、そつちを見たらあの男が困つた顔をしていた。どうやら考えていたことは一緒らしく、タイミングもかぶつたらしい。

狙い通りに命中しワニ男が凍つてしまつた。あまりの効果（武器が凍つて使えなくなるぐらいを期待していた）に若干引いてしまつたが、チャンスには変わらないので私は少年に向かつて合図を送つた。少年も一瞬呆然としながらも見事に攻撃を当てて、ワニ男の片方の目を潰すことに成功する。

ワニ男も不利を悟つたのか、恨みごとを言いながら逃亡していつた。その引き際はいつそ見事というしかないわね。私は少年達と合流して、得意呪文である回復呪文をかけてあげた。その際に改めて自己紹介をしあつて、お互いがアバン先生に教えてもらつた者同士といつたことで、話がはずみ意気投合した。ただし、魔法使いの男に関しては、許す気がまつたくないけどね！（まあ素直に謝罪するなら2.

3発で許してあげようかしら)

アバン!!我らが師

s i d e ザボエラ

キー ヒヒイ ようやつとついたわい。ここがデルムリン島とかいう田舎の島か・・・・ほほう!これがアバンが張った結界か・・・じやがこんなものこの妖魔司教ザボエラに掛かればどうといったこともないわい。

おつたおつた貴様がプラスとかいう鬼面道士じやな!!キヒヒヒヒヒ・・・・!!奴もようやつとワシの強大な魔力に気が付きおつたか!「この島はアバンどのが残してくれた魔法陣で守られているはず!」とかいつておる。無礼にもこのワシに向つて「お・・お前は」とかいつておるが、ワシは寛大しやからな!!無知なるやからの多少の無札は許してやるわい。

「ワシの名は妖魔司教ザボエラ!!大魔王六軍団のひとつ・妖魔士団の軍団長じや」慈悲の心で、奴の質問に答えてやつた。さつきとの島に来た目的を果たして帰るとしよう。元はといえば、あの単細胞が何も考えずに行動したのが、そもそも悪いのじや・・・・

s i d e ダイ

マアムと一緒に村に着いたら、ゴメちゃんが出迎えてくれた。マアムから俺たちの荷物に紛れて入つていたと聞いた時にはビックリした。ゴメちゃんと戯れていたら、向こうから女性が一人歩いてくるのが見えた。マアムがお母さんと呼んでいる。正直知識としては知っているが、お母さんがどういったものかは理解していない。

マアムはおばさんに、俺達がアバン先生の弟子であると伝えると嬉しそうな顔をしていた。話を聞くとおばさんも昔、アバン先生と一緒に冒険に出ていたことがあるらしい。死んでしまったが、おじさんも一緒に旅をしていたとマアムが教えてくれた。

ということはマアムは『えりーと』ということらしい。お姉さんが「えりーとは爆発しろ」とか「逝けめん死ね」とか訳の分からぬことを呟いていた時に、説明してくれた条件にマアムはあてはまりそうだ。そんなことを考えていたら、おばさんが「アバン様はお元気ですか?」などと聞いてきた。

思わず「そりゃあピンピンします!!」と力強く返答してしまった。色々と話しているうちに、話の展開でそのまま村に泊まつていく話になってしまった。本当はボロが出る前に立ち去りたかったんだけど・・・こんな時にポップが元気だつたら、うまく誤魔化してくれただけど・・・(マアムにとつちめられて、機能停止中)

そのあとマアムと会話した際に、アバン先生の話やあの変わった武器の話をしてくれた。理屈はわかんないけど、あの筒に呪文を封じこめることが出来るらしい。その場の話で、いくつかの呪文を入れてあげたら大変喜ばれた。今は基本的な呪文しか使えないが、契約は結構な数が出来たので、そのうち使用出来る様になると思う。

お姉さんの様に、遺失冰雪呪文とかいって、海を完全に凍らせたり出来たらかつこいいんだけどまだ先だね。旅の途中にポップに呪文をならつて思つたんだけど『遺失呪文』ってどんな呪文???

第3の仲間!!

side クロコダイン

ぬおおおおお!!不覚・・・不覚だあ!いかに強敵といえども、あるような小僧一人にしてやられるとは・・・・・あのへんてこな武器で、一瞬動きを止められたとはいえ片目を持つていかれるとは!!なる不覚!なんたる体たらくだ!!

オレが物に八つ当たりをしていると、どこからともなく声が聞こえてきた。「キイヒヒヒヒー荒れておるなクロコダインよ」そんな声が聞こえてきたが、オレのアジトに簡単に侵入してくるとは・・・・何奴だ!!

「ウヒヨヒヨヒヨヒヨウ・まあ無理もないわな、たかだか数人のガキ供にそのような無様な傷を負わされてはのう・・・」

そう言つて姿を見せたのは『妖魔司教』ザボエラ!!オレと同じ軍団長で、『妖魔士団』を率いる男だ。オレはこの男が大嫌いだ。なんといつても性格が姑息すぎる。知患者であるのは間違いないのだが、どうも性格があわん!さらに気に食わないのが、なぜこの男がここにいるのかだ!この男に訪問される理由が思い浮かばんし、浮かびたくもない!!

「折角お前さんに、策を授けてやろうと思つて出向いてやつたのに嫌な顔しなさんな」そう言つてくるザボエラにオレは思わず怒鳴つていた。「どうせいつもの姑息な策だろう!なぜオレが貴様の薄汚い策などに頼らねばならんのだ!!」

何時もだつたらそこまでは言わないのだが、オレも小僧にやられて機嫌が悪かつた。そんなオレに追討ちを掛ける様に奴が「いい勉強に

なつただろう・・・奴ら人間を馬鹿にするのは結構だが、侮つてやられたのでは話にならんのう」と言いやがった!!!

いつもの奴なら「ウヒヨヒヨ」とか言つて場を濁すのが精々だろうが、今日に限つてここまでオレのことをここまでコケにすることは……ここでいつそ始末してやろうかと半ば本気で考えていたら、更にオレの神経を逆撫でする様なことをほざきやがつた。

「のう若造よ、卑怯や姑息がなぜ悪いんじや？ 貴様とワシでは立場が違うんじやよ……立場がのう。お前ら武人と言う生き物は、正々堂々やら誇りと言つた訳の分からん物に囚われおつて、軍に要らぬ損害を出すごく潰しどもじや。正面から戦つたからといって何か得があるなんかのう？ 夜討ち、朝駆け、謀殺、毒殺、結構なことじや。【相手の弱点を攻めるのは、気にくわん】じやと……それだけ必死に勝つため手段を探し求めている証拠……おおいに結構じやと、ワシは思つておる。ワシは魔王軍の『軍師』じや！ 何が何で勝たねばならんのだ。貴様の様に堂々と戦いました、負けましたじや済まされんのじや。そんなことも解らんで、何が『獸王』だ。片腹痛いわ！」

あまりにいつもの奴とは違ひすぎて思わず圧倒され、口を出せずにいると更に奴の話は続いた。「なあ『獸王』よ、今の魔王軍に人間共に勝ちきるということの困難さに気づいている者が何人いるんかのう。他の幹部共は、人間なんぞ虫けら同様としか考えておらん。大部分の人間は確かに虫けら同様だが、物事にも『例外』はあるものじや。貴様に傷を負わせた小僧もそうじやし、ワシですら足元にも及ばない大魔法を使う女とかのう……」ザボエラは言いたいことを言つて満足したのか、奴らしくない穏やかな口調で話しかけてきた。

「人間を馬鹿にしくさつた奴らに、ワシの策を飲ますのは至難の技じやて……まあお前さんもワシの策を受け入れる気になつたら『悪魔の目玉』で連絡を寄越すがよい」オレが呆然としていると、ザボ

エラは言いたいことだけ言ってあっさりと帰ってしまった。

危機迫る口モス

side マアム

用事があつてダイ達の部屋の前まで来たら、部屋の中からダイとポップの話が聞こえてきた。聞く気はなかつたんだけど、耳に入つてしまいどうしたものかと思つていたら、二人の話が不穏な方向へと進んでいった。完全にタイミングを逃してしまつた私は、ただ二人の会話を聞くことしか出来なかつた。

聞かなければ良かつた。アバン先生が死んだなんて・・・・二人はアバン先生の意思を継ぎ、魔王軍を阻止する為に旅を始めたことをその時初めて知つた。そんな二人をほつとけない気持ちで一杯だが、私にはこの村を守る使命がある。私の生まれ故郷であり、父さんが眠るネイルの村を・・・・

そうしてとうとう私の心が決まらないまま、ダイ達が村から旅立つ日がやつてきてしまつた。一緒に付いて行つて力になつてあげたい。でも村が心配・・・揺れ動く私の心を見透かした様にお母さんが、ダイ達について行く様に進めてくれた。おかげで踏ん切りがついて、私はダイ達と口モス王城に向つて旅の第一歩を踏み出したのであつた。

side ポップ

マアムが一緒に着いて来ることになつた。旅の仲間が増えるのは良い事だが、あの凶暴な性格はなんとかならないものか・・・そんなことを考えながら歩いていたが、いつこうに王城に着く気配はなかつた。マアムの道案内が悪いんじやないかと言つてみたら、『敵に見つからない様に、わざと遠回りをしているのよ!』と怒られてしまつた。本当に凶暴な女だ!

そんなやり取りをしていたら、ようやつと森を抜けロモスの城下町を見渡せる所までたどり着いた。見た感じあと一時間も歩けば何か町に入れるだろう。本当に長かつた・・・結局2時間歩いて、ようやつと王城にたどり着いたところで、衛兵に止められてしまい明日来いと言われた。何とか交渉して入れてもらおうとしたが、頭の固い連中には通用しなかった。(覚えとけ！コンチキシヨウ共め!!)

仕方がなく今日は宿屋に泊まって、明日出直してやることにした。宿屋に着いてすぐに、ダイが価格交渉を始めた。値段交渉の結果、格安料金にしてもらつたらしい。このクラスの宿で5ゴールドとは悪くない感じだと思い、ダイも中々やるもんだなと感心した。とても孤島でモンスター達と生活していた人間とは思えないが、頼もしいかぎりだ。

宿屋の主人の話だとこの宿には、魔王軍と戦っている『勇者様御一行』が泊まっているらしい。ダイは興味深々な様子であり、マアムが止める間もなく速攻部屋に押しかけていった。おれが追いついた時には、ドアを猛烈な勢いで叩いていた。どうやら相手にされなかつたらしく、意地になつてている様だ。戦闘になると物凄いが、そういうった所は年相応なお子様だなあと思う。

勇者様？がとうとう我慢出来なくなつたのかドアを開けてどなつてきたが、どうやらダイの知り合い？だつたらしい。結論から言うと、こいつらはニセ勇者だつた。ダイに話を聞くと、勇者と言うより小悪党といった言葉がピッタリな感じだ。ゴメちゃんを捕まえて一攫千金を狙つたらしいが、ダイにコテンパンにやられ、大金より小金を稼ぐ方へ方針を転換したらしい。

ダイ曰く、中々の強さらしい。城の用心棒でもすれば、金も稼げるのにと思いそう言つて見たら、樂をして『廃城荒らし・格下モンスターばかりを討伐・適当な魔法を兵士に教えて高い授業料を取る等々』金

稼ぎたいと言つことらしい・・・ダメだこいつら早くなんとかしないと!!

そんなこんなで夜が更けていった。翌日、モンスターの雄たけびで目が覚めることとなるが、魔王軍との戦いがあれほどの激戦になるとは、当時のわれ達に知る由もなかつた。

百獣総進撃!!

side クロコダイン

もうオレには後が無い・・・小僧達の実力を知るハドラー殿やザボエラはともかく、少数の人間に苦戦していると知つたら他の軍団長達に何を言われるか、分かつたものではないわ。あいつらが騒げば、この次第が大魔王バーン様の耳に入り、軍団長解任も十分にありうる事態だ。

いまからオレは鬼とならねばならん・・・!武人としての誇りも・意地も・すべて勝利あつてのもの・!! たとえどんな手を使つても『ヤツらを討つ!!』

オレは配下のモンスター達に総攻撃を命じた。本来であれば口モス王国なんぞ、手を抜いていても吹き飛んでしまうぐらい貧弱な相手だ。百獣魔団での総攻撃など弱いものいじめ以外の何物でもないが、オレに傷を負わせるほどの相手だ。これを機に全力で殲滅してやるぐらいで丁度良いだろう・・・もうオレには後がないのだから・・・す。

side リーゼ

さて久しぶりの登場です。今日は口モス王国の奮戦ぶりを見学にきました。勇者パーテイーＶＳクロコダイン・ザボエラ連合軍の戦いの行方が、王国存亡の鍵となるでしょう。もう一つのポイントは、実はこの口モスという王国には、隠棲している伝説の魔女がイルのです。

口モス王国には遙か昔からこんな話があります。大人が悪さをした子供を躊躇るのに『悪いことをしていたら《黄金の魔女》に連れて

いかれて、八つ裂きにされるぞ！」などと煽つて、子供達を注意する時のネタに使っています。各地でも似たような話があると思いますが、口モスの場合・・本当にイルのです。

まああの気まぐれやさんが人間に手を貸すかは解りませんが、介入して来た場合クロコダイルはワニのステーキになつてしまふかもしれません。なにせ彼女を初めて見た時、とある男と対戦中だつたのですが、相手が放つた火炎呪文メラゾーマを小指ぐらいの火炎呪文ラで相手の呪文ごと相手を粉碎して『妾わらわが放つたのはメラゾーマではない・・・ただのメラジヤ！』を素でぶちかましていましたからね・・・リアル大魔王VS.ポップを見た心境でした。

そんな昔話はともかくとして、宿屋を飛び出してモンスターを追つて行くダイ少年が見えました。遅れて飛び出してきたマアムをこつそり見送りながら、今回のターゲットであるポップとの接触を開始しますよう。

どうせ臆病風に吹かれたポップが尻込みしている間に、マアムが「先生から何をおそわったの!!」とか「命をかけて先生の仇討ちをしようとしていると思っていたわ!!」とか「もう頼つたりしないわ・・・アンタなんて最低よ！もう顔も見たくないわ!!!」などとポップを抉るセリフの連弾を叩き込んだ後でしょう。

そこで彼と接触して戦の女神の様に、やさしい近所のお姉さんの様に、そして大人の女性の様に振舞い最終的に戦いに赴く様に仕向けましょう。（ただ甘やかすだけではいけないのが、難しいところですが・・・）

マアムは彼の操縦法がまだ分かつていないのでしょう。彼の強さは『勇氣』・・・何度も傷つき、凹み、臆病風に拭かれ、挫折を繰り返しながらも前に進む『勇氣』・・それがポップの本質なのです。今

はへっぽこですが、幾度の挫折を繰り返しながら成長して『大魔道士』となるのですから、今の内に知り合いになつておいた方が良いでしょう・・・なるべく恩を売った状態がベストですね。（私もどんどんと外道になつていきますね・・・）

外伝 おそらく使われないお話シリーズ ある空間での出来事・・・アバンV/Sキルバーン？

s i d e アバン

「ようこそ勇者アバン！ 僕のオリジナルの亜空間へようこそ」そう言つて出迎えたのは、先程まで戦っていた死神キルバーンだ。戦闘前とは雰囲気が変わつており、とてもこれから戦闘をしようとする気配はない。しかし、奴は人間を騙すこと得意としている魔族であり油断は出来ない。

「ここでの出来事は、たとえ大魔王バーンとて見ることは出来ない亜空間であることを最初に宣言しておこう！」そう言つてから奴は私に向つて話し掛けてきた。

「君を知つたその日から、君とのデートを心待ちにしていたんだ。まずは紅茶を一杯どうだい？地上産の最高級茶葉を用意したんだ」周りを良く見るとすでにティーセットと豪華なテーブルが配置されており、本気でお茶会を行なおうとしている様にも見える。

「貴様とじやれあうつもりはない！」そう言つて様子を窺つてみたが、キルバーンは平然としてこう言い放つた。「尊敬には値するが、丸腰の相手に向つて一方的に攻撃を仕掛けるなんて君には出来ないだろう？」そう言つて、お茶の用意を始めるキルバーン・・・その様子から何かしらの提案があるのかもしれないと、私は警戒しながらもテーブルに座ることにした。

「流石はあの魔王バーンが警戒する、地上屈指の切れ者アバン！」満足そうに呟くキルバーンに、馴れ合うつもりはないので、早く話をす

る様に催促する。奴はおもむろに話を始めた。

「君達人間は僕のことをどのぐらい知っている??」あまりの質問に私は、困惑しながらこう答えた。「魔王軍のNO.3で、血も涙もない冷血漢。自分の愉悦の為なら、人間の命なんて虫同然と考えている人類の敵。コソコソと動き回るのが大好きで、自分では決して動かない卑怯者」私は相手の反応を見る為、あえて怒らせる様なセリフを並べてみた。最後にキルバーンを挑発する様に「まだ必要ですか?」と付け加えた。

「君の認識には大きな間違いがある。もちろん性格の事じやないよ!」そういつて、してやつたりと言った風のキルバーンであつたが、更に話は進む。「間違いその1・・・僕は魔王軍においてNO.3なんかじゃない。人間風に言うと、せいぜい上の下ぐらいの位置にいる。」

思わずどう答えて良いのか解らなかつた・・・・奴はそんな雰囲気を察した様に更に「魔王軍の本当の戦力は・・・解りやすく言うと、今のハドラー君でようやつと軍団長クラスといったところでしかない」正直何を言われたのか理解出来ない。話を聞いたり、見たりした超魔生物となつたハドラーのレベルは、そんな生易しいものではないはずだ!!

間違いなく、敵に回せば大苦戦を免れない、最強の一角であると思つていた。それが、軍団長クラスでしかないと・・・キルバーンの真意が理解出来ないが、ここで取り乱しても状況が良くなる訳でもない。せめて出来るだけ情報を持ち帰り、今後に繋げるべきであろうと思ひ話の続きを促がした。

「実はここまで話は、やつかいではあるが致命的な問題ではないと僕は思つてゐる。今回は大魔王も本気じやない・・・戦力の大半を温存しており、君達と戦つて損害を出すつもりはない。精々君達が

力を合わせれば、苦戦するであろうが大魔王の目の前までは、恐らくたどり着ける程度の戦力しか出さないと思つてゐる。」

「その証拠に僕程度が、NO・3だと思われているんだからね」そう言いつつ奴にしては真剣な口調で、私に向つて取引を持ちかけてきた。「一時的で良いから、君達と手を組みたい……間違いその2に当たるが、僕も好きこのんで人間達に嫌われるキャラを演じてた訳じゃない……仕方がなくやつっていたんだ！」

思わず反論をしようとして、口を開きかけたところに奴がすかさずセリフを被せてきた。「君達にも言い分があると思う。僕は君達が僕と手を組み易い様に、人間達がギリギリ妥協出来る範囲に悪事は押さえてきたつもりだ。外見上は惨たらしく見えたり、おちよくつたり、罵に掛けたりもした。しかし僕のせいで人間が死なない様に、細心の注意を払つてきたつもりだ。……何せ僕も監視されていて、死神キルバーンとしての演技をするしかなかつたんだ。」

私は奴の事など信頼に価するとは思つていない。だが奴が我々人間に何を求めているのかだけは、聞いてみる必要性があると感じていた。

「肝心な取引内容はなんですか？」

そう言つて先を促がすと奴は「誰にも邪魔されずに戦いたい御方がいるんだ。……闇よりもなお暗き存在^{もの}、夜よりもなお深き存在^{もの}、すべての魔族の頂点。あの大魔王バーンですら及ばぬ存在……御身は人間でありながら、魔界最強であられる偉大なるリーゼ様……彼女と敵として戦いたい。君達が大魔王を倒すのが目的であるなら、我々は手を組めるはずだ!!……彼女は大魔王に危害を加えようとするものに、容赦はしないのだから!!」

「その口調だと敗れるのが前提に聞こえるのですが、それでも良いのですか？」思わずあまりに斜め上な内容に、普段の口調に戻つてしまつたが、それほど衝撃的な話でした。

キルバーンは満足そうに頷くと「今回が唯一のチャンスなんだ。普段であれば、彼女に心酔している魔界の猛者達が彼女をガードしているんだ。だが今回は、そんな部下達を誰も連れて来てはいない。一人一人がハドラー君をも上回る魔界の実力者達……本来であれば彼女に手を出す前に、彼らに始末されてしまうだろう」そう言つて自嘲気味に話すキルバーン。私は無粋ではあるとは思いましたが、何故そこまでして戦いたいのか聞いて見ることにしました。

「ある時から僕は、リーゼ様に認めてもらいたいと思う様になつた。だが人間風で言えば、大魔王の片腕と部下A 女王陛下と兵士A。おそらく視界にすら満足に入つていらないと思う。であるならせめて武人として評価されればと思い、修行に励んだ。そして実力を隠しつつ、彼女と相対する機会を待つた。悔しいが、全力を出して彼女の部下一人に勝つのがやつとだと思う。僕はリーゼ様に敵として相対したいんだ。勝つのは100%無理だが、敵として戦いたい。君達への報酬は、そうだね……僕の命を削つて稼いだ僅かな時間つてのはどうだい？おそらくは5分……10分は持たないかな」

こちらにとつては特に不利になる内容ではない。むしろ強敵を一人引き受けてくれるのだからありがたい話はある。しかし私は若干だが、奴が不憫に思つてしまつた。奴はおそらく自分の感情に気が付いてないのだろうが、その感情は人間で言うところの……これ以上は無粋か……

「そうそう、手付けがわりと言つたらなんだけど、リーゼ様の本名は『リーゼロッテ』と言うらしいよ」そう言つてヒラヒラと手を振つて空間を出て行きました。私がこの空間に連れて来られる前にした仕掛け

けは、バレていた様ですね。

ですがリーゼロツテですか・・・・・まつたく厄介事ばつか
り増やしてくれますね。

まさか俺が
•
•
•
☆3

ダイ大の二次小説書いてたらいつの間にかに寝落ちして夢でも見てるなんてチャチな状況ではなく、夢でも見てるんだろって頬を抓つて「いたあい」なんて冗談やつてる場合じやないヤヴァアイ状況に俺は陥つてはいる。何かほつぺたがいつもより柔らかいし、胸に見慣れないメロンがついてるし・・・何がヤヴァアイつて声をだしてみたら聞こえる声が、○由実さんですよ！スノー■△○□で守護者統括様ですよ！！あの色っぽいボイスでおれがしゃべつてるよーー！！つて感動に浸つてたら遠くから男の声がするので振り返つて見た。

「そこの女、この魔界で天界装備を身に纏つて堂々としているとはい
い度胸だ!!」

なにやらどこかで聞いた事があるようなセリフとともに、
プレッシャーを纏つた魔族の男が姿を現した。

【あつこれマズイやつだ】と思ひ逃げようと思つたが、一瞬考へたのが
イケナカツタのか男の接近を許していた。これが噂に聞く『大魔王か
らは逃げれない!』か――――――――――――――――――――――――――――――!

もしかして俺の今の装備つて、男が言う様に天界装備なのか？認め
たくはないが俺の予想が正しければ、
纏つたりしたりして・・・・・
バルムング
神劍を腰にさげ、
オーディーンローブ
聖衣を

なんか状況が読めてきた気が・・・けつして、けつして認めたくもないのだが・・・ああそうですか・・・どうせ事故で憑依でT Sでオカルトで神の陰謀なんだ。これから自分が作つた物語通りメンドクサイ魔王軍生活が始まるんだな。クソガア・・・

魔界のど真ん中でそんな格好をしていればいやでも目立つが、ヤクビヨウガミ
神の陰謀の為、今の私には回避不可な状況です。まずい・・・精神汚染が始まりやがつ・・・始まってしまいました。作者にも影響を与えるとはどんなでもねえ影響力だな。仕事が忙しく連載期間をすぐ空けてしまつたのが仇になつていやがる・・・この先の内容を忘れかけています。えーっと神の強制力つてどんな内容だつたけ・・・でしたか？まずいことに思い出せませんね。とにかくこの世界に来てしまつた以上は、私もキャラの一人として振舞うしかなさそうですね。

目の前にいる男ですが、さつきまで誰なのか分かつていたはずなのですが思い出せません。男について考え込んでいたのですが、その隙に相手は容赦なく攻撃を仕掛けてきました。

「くそ逝けメン野郎があ！　問答無用かよ！」と思いつつそのセリフの言語化に失敗した私ですが、攻撃は待ってはくれません。男の一撃は通常ではありえないレベルの闘気が込められていることを本能で感じ取り、恐怖で身が竦む思いでした。破滅的なエネルギーの奔流が、私に迫つて来ます。咄嗟に飛翔呪文^{トペルラ}で後方に下がつて回避できたのは、憑依している身体のスペックのおかげでしょう。殆ど無意識の行動だつたのですが、何とか切り抜ける事が出来た様です。

さつきの一撃で、私の中でなにやらスイッチがONになつた感覚がします。先程の恐怖は薄れていき、逆に強敵に対する高揚感らしき感

覚が身を支配していきます。（この人戦闘民族だつだけか？）とりあえず生き残る為には戦うしかない様です。戦い方は体が覚えている感じがしますし、戦闘に関する知識はどういう訳か次々と頭の中に思い浮かべることが出来る様なので、実際に戦闘が出来るのかは度胸の問題です。

度胸の問題も先程から戦いたいといった感覚に汚染され始めているので、戦闘する分には問題なさそうです。ですが闘うことが出来るといつても、油断していて良い相手では無さそうです。一撃に込められている力が否応なしに、死を予感させられます。本気で行かなくては、あつと言う間にぬつ殺されてしまうでしょう。とりあえず今は相手の正体の事は忘れて戦闘に専念する事にしましょう。

不足の為、省略させて頂きます

戦闘描写は作者の力量レベル

「やるな・・・余どこここまで戦える者など、魔界広しと言えどもそれはいないであろうな!!」

そう言いながらも戦闘態勢を崩さないこの男からは、途方も無い魔力の高まりを感じました。次の一手で、この勝負を決めに掛かつて来ているのは明白でしょう。

先程の戦闘で男が火炎系の呪文を好んで使用していた事から、火炎呪文を撃つてくるであろう事は予想が付きました。

(この男たしかに見覚えがあるが・・・・・と思い出せませんね)

私も急いで呪文の準備を始め、火炎呪文を選択しました。(ここで何か別系統の魔法をぶつけたら、私的に負けた氣がするんですね)

「火炎呪文」
『遺失火炎呪文』

お互いの呪文は空中で激突し、均衡状態を保っています。威力はまったくの互角の様です。本来であれば追撃を行うべきなのですが、男の呪文を見てあっけにとられてしまいました。私はその光景に思わず『・・・・あれは、カイザーフェニックス』と呟いていました。

「呪文に名前など付けた事などなかつたが、なかなか良い名前だな。これからそう呼ぶことにしよう」男はそう言つてこちらに話し掛けってきたのですが、私はそれどころではありませんでした。

前提条件がクリアされてフラグ回収が済んだのか、一部忘れていたことを思いだせそうです。男のことを思いだせてきたので、不自然にならない様に自分の名前を名乗つて確認の為、名前を聞き出す事にします。男は思つたよりあっさりと名前を教えてくれましたが、やつぱ

り大魔王バーン様でした。しかもよりもよつて、凍れる時間の秘法によつて肉体の時間を止めてしまう前の真大魔王状態のバーン様とは…（そろいえば、私つてばバーン様とやり合えるぐらいの強者つて事なの??）

これから私は大魔王バーンに勧誘されて魔王軍に仲間入りだつた氣がするが、あまり先の事は思い出せない様にされている気がする。その内に神の意思に汚染され、違和感すら感じなくなつてしまふのだろう。願わくば初期目標である神殺しを成就させ、この状況をぶつ壊すことには成功することを切に願う。